

心はいつも
旅する
加藤 九祚

ユーラシアンホットライン

1999.1.31
VOL-12

昨秋帰国したナターリヤから年賀状

(原文のまま)

あけましておめでとうございます
旧年中は大変お世話になりありがとうございました。おかげさまで日本での1年間は私にとって忘れられない楽しい思い出となり、大変べんきょうになりましたと思います。Eurasian clubのおかげで日本のいろいろなところを見ることができたし、皆様にいつも本当に親切にさせていただいて、ありがとうございました。皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。または是非日本へいきたいです。今後もよろしくお願ひします。

ヤクーツクへようこそいらっしやって下さい。

Eurasian clubの皆様によろしくお伝え下さい。

С наилучшими пожеланиями
ナターリヤ

新年あけましておめでとうございます。本年もよろしく。

年末年始に沿海州、サハリン、アムール川流域の民族村関係者と話し合ってきました。民族の未来への危機感と希望。多いに感じるものがあった旅行でした。日本の先住民族アイヌの友人浦川治造さんと一緒でした。浦川さんも初の海外旅行でしたが現地でカムイノミ(慰霊の儀式)を行うなど、心に刻むところがあったようです。

帰国後早々に事務局会議、群馬テレビ出演、留学生とのホームページ会合、会報印刷、モンゴルドキュメント映画会と杉山正明氏講座、ユーラシアンフォーラムの貢献者リスペク君(キルギス)送別会の相談と事務局の作業は進めています。

昨年調整していた、「1999年度ユーラシアンフォーラム/インターカレッジ文化講座と留学生トークフォーラム」のプログラムをお届けします。申し込み登録をお勧めします。

年末には、キルギスのトラット君、チョルボンさんからクリスマスメール、お正月には、昨秋サハに帰国したナターリヤから年賀状がとどきました。今年こそユーラシアコミュニケーションネットワークを構築したいと決意しています。

<当面のクラブの催し>2月14日、事務局会議(群馬)：秋までの活動プログラムを詰める予定

◆キルギス留学生・リスペク モロドガジェフ君送別会

日時：2月21日午後1時半

場所：カニ料理店「北海むさし」/東上線川越駅西口からタクシー4分

会費：3千円

◆ドキュメンタリー映像作品上映会 四季「遊牧」～ツエルゲルの人々～

日時：2月28日(日)2:00～4:45/開場1時半

会場：オリンピック記念青少年総合センター/センター棟3階310号(160人)

小田急線「参宮橋」徒歩約10分

参加費：500円

要予約：ファックス/オフィス遊牧民(03-3605-8438)かユーラシアンクラブ(044-965-2537)

電話/オフィス遊牧民(同上)かユーラシアンクラブ(044-965-2536)

でお願いします。

◆世界陸上室内競技会参加選手交流及び赤城山麓視察会3月5-6日

◆インターカレッジ文化講座ユーラシアンフォーラム(補講)

日時：3月7日午後1時半から/開場1時

場所：オリンピック記念青少年総合センター/センター棟5階503号(40人)

テーマ：「マルコポーロの謎」

講師：杉山 正明・京都大学教授

申し込み：空席若干/会費2千円

発行/ユーラシアンクラブ 住所/神奈川県川崎市麻生区王禅寺 2485-2-204

電話：044-965-2536 ファックス：044-965-2537 E-mail:PAF02266@nifty.ne.jp

homepage <http://member.nifty.ne.jp/EURASIANCLUB/>

インド巡礼中の寺沢さんから年賀／道中したための詩！

ユーラシアに魅せられた僧侶寺沢さんが弟子十数名とネパールインドを巡礼の旅を続けています。3月頃まで広くインドを巡るそうです。旅の折々にしたためのメモを詩に託して送って頂いたのでその一部をお届けします。

□インド巡礼に発つ

みほとけの国さへ核の火に亡ぶ日のなからんと祈る旅かな

□如来成道の地に仏舍利を通して(ブツダガヤ)

そのかみの樹下道場のみさどりのかたみはいまほはましその蓮華座にそのかみの金剛宝座にみほとけのかたみをまつりて祈る舌かな

□尼連禰河を渡る

ニランジャナわたる浅瀬の風すずし三猿菩提のかほりつたえて

□とある村落、世尊もとどまり給ふと伝ふ(クルキハール)

みほとけの宿りし丘の夜はふけて集ひし子らとものがたるかな

□道中、如来の出でさせ給ふ温泉にひたる。 恩師上人の王舎城開教の

みぎり、ちよとを湯治せる所なり(タポワン)

在りし日の病める恩師をいやしたるタポワンの湯にわれもいゆらむ

いにしえの塔のそはなる菩提樹の木陰にたちて遠き日思ほゆ

□タポワン温泉から峠を越えんと、日暮れてジュンティヤン村に

山の上に蓮の池あり杖林てふ仏住まわせ給ふ里なり

杖林の精舎の跡に古仏あり朝風そよぐ蓮の水辺に

□静寂たる旧王舎城の五山のみぎりより如来常在の雪蔵山をほるかに

拝みて

まびしくもかなしくもありとこしえのいのちのしじま望むる我は

いにしえのいはおのしじまおそかに永遠なるいのちのながれ果てしなし

□旧パタリプトラ(妻子城)のガンジス川の岸からバイシヤリへ向かつて

河を渡りて

いくさなき彼岸の世紀夢みつつ渡る恒河の波しづかなり

□バイシヤリにて歌ふ、古池に

音もなく舟こぎ出では朝霧の晴れてかがやく塔拝みたり

みほとけもふり返り給ふうるはしきバイシヤの里たそがれにけり

モンゴル子供支援基金について

／12/19 ユーラシアンフォーラム

モヨブ オユンビレグ (中央大学大学院)

モンゴル人で経済のことを知っている人は少ない。ソ連時代の経済体制に慣れていて、以前は生活がひどくなったら共産党にお願いにいけば事足りていた。モンゴルの人口は240万人、首都ウランバートルには60万人が住む。90年の初めから自由に職業を選ぶようになった。

今モンゴルではストリートチルドレンの存在が問題になっている。社会主義時代には無かったことだ。10歳、11歳になっても読み書きができない(社会主義時代は識字率100%)、学校へいけず、できることは泥棒だけ。

70年代から遊牧の生活に変化が生じ、町に住みつくようになったが、暮らしの仕方が分からない人びとが、アル中、ホームレスになっていく。"ウオッカ・カルチャー"とも言われる。子供のホームレスの数は夏期と冬期では変動する。夏は5千人、冬は2,3千人。夏場は親が子供を外へ追い出してしまうからだ。私はこうした子供たちを救うために、日本でこのことを訴えつづけている。

具体的には、里親を募集して、援助金をモンゴルに送ること。しかし、この金にまつわるいろいろなトラブルが絶えない。こんな例がある。友達のドイツ人と子供発展センターを設立。ドイツから子供一人につき募金を10ドルとして、8人の子供のいる家に80ドル送った。西側の感覚としては妥当だろうが、大統領の給料が100ドル(1万5千円)なのである。思わぬ大金を手にして親が麻痺して飲んでしまった。各家庭で使われる支援金の使途明細をチェックすることは絶対必要だ。しかし、現実にはホームレスにお金をあげることはできないし、あげたら逃げてしまうか、それに依存するようになってしまう。ホームレスになる前の家族にお金をあげるしかないのだ。これが「子供発展センター(ウランバートル本部ハイシャン)」の趣旨だ。政府の仕事を代行している気持ちだ。古着を送ってもらったことがあるが、運賃だけで50万円、また援助物資は往々にして"売りさばいて着服"のパターンが多い。とにかく金の支援というのは難しい。アルコールをやめるなら支援する。こういう約束だったのに約束を破る。支援が止まる。約束

を守らせるのも根気がいる。お金を送る時（私自身も自戒しているが）、受け取る時、渡す時、使う時、それぞれの監視体制をしっかりとさせなければならない。ドイツ人などはその点ドライで合理的な金の与え方をしますが、日本人は人の懐を指図するのは気が引けるのか、金は出すがあまり口は出したがらないようだ。

社会主義時代はしっかりしていた教育制度も、たとえば学校など、箱物自体が商売のために使われてしまって、教育の場が文字どおりない。そこで私たちは、

1. 地域社会で家庭の替わりになるような、教育のための子供の家を目指す。
2. そうした子供たちのためにも職業訓練の場を提供する。自分で頑張るという考え方を教え込んでいく。自立支援センターの働きも目指しているのだ。

モンゴルではマイナス 10 度は暖かい方だ。しかし、薪や石炭が不足していることは変わりはない。センターでは朝 8 時から午後 1 時まで授業し、その後は母と子が一緒に過ごせる場所を提供したい。まずは長屋作りからだ。簡易住宅からだ。

ボランティアも増えてきている。国外の NGO、もちろんここでもいろんな人々が入り込んできて問題は多い。そんな中、手弁当で頑張っている日本人を 2 人知っている。彼らはモンゴルで日本語を教えながら、毎日各家庭を回ってスポンサープログラムにしたがって、計画を指導、状態をチェックしている。小屋の修理のためのスタッフを募集し、その活動をモンゴル内部で広報活動していくことがまず第一だろうが、2 人とも現在は手一杯でそこまで気が回らない。給料はつき 5 万トゥルグ（50 ドル、6 千円）が最低ラインで、7 万 2 千円が一人の年間活動に必要なだろう。

言葉が不自由で言いたいことも言えなかったがあせらず実践で結果を出していきたい。

サハ人の「再生と新年の祭り」：イスィアフ

／12/19 ユーラシアンフォーラムから
イリーナ ティシェナ（千葉大学留学生）

どの民族にも昔から伝統的な祭日があります。これらの伝統は世代から世代へと大事に伝えられています。サハ民族にとっては、イスィアフがこの伝統的祭りです。サハのイスィアフは太陽の神や自然のいろいろな神への崇拜と強く結びついている。イスィアフは典型的な自然崇拜の祭りで、中央アジアステップの夏の馬乳酒祭りが起源です。昔サハの先祖は自分の家畜や家財道具とともに果てしない広々とした草原を遊牧していました。ヤクート（サハ）の祭りの要素には、トルコ系諸民族、ツェバ、アルタイ族の夏祭によく似た特徴が見られます。例えば、お祭りの厳粛な儀式的時に馬に水を振り掛けます。イスィアフでは伝統的スポーツゲームや競馬が行われます。

初めてイスィアフについて確実な情報を書いたのはイデスという旅行者です。彼は 17 世紀にシベリアを経て中国にいきました。特に彼はサハの祭りは 1 年に 1 度であって、春の訪れを盛大に祝うと指摘しました。

祭りでは人々は焚き火をしたり、馬乳酒を作りお客さんにこの元気の出る飲み物をごちそうします。

昔は白いシャーマン（アイウ オイウウン）がイスィアフを開幕しました。彼には 8 人の女の子と 9 人の男の子が随行しました。日の出の時にアイウという天の神に頼みごとをします。

頼みごとをすることは、イスィアフでは大事なことです。サハには牧畜民族の昔からの伝統が残されていました。牧畜民族は 1 年を二つに分けています。すなわち冬と夏です。サハはイスィアフを 6 月 21 日から 22 日までの夏至の日に祝いました。サハ人はイスィアフを新年と呼びました。サハ人はこのお祭りを自然と人の誕生と再生として祝いました。

イスィアフは将来への期待とかたく結びついていました。長い冬の後サハ民族はイスィアフで心から集い遊ぶことができました。次の日の朝まで馬乳を飲み、民族的ゲームやレスリング、競馬、英雄叙事詩（オロンホ）の語り、オスオハイが行われました。オスオハイは輪になって踊る一番大事な民族舞踊です。伝説によるとお祭りは 9 日間にもわたることがありました。イスィアフが終わるとみんな拳って草刈りにきました。一番良い昔の祭日の伝統は現代のイスィアフでも発展しています。

1991 年にサハ共和国の憲法が制定されました。それ以後イスィアフはサハ共和国の祝日になりました。

赤城山麓で宝物“明治”に触れる

ユーラシアンロード構想実現化へ

ユーラシアンクラブ幹事 井口 隆太郎

新潟→群馬→東京に至るユーラシアンロード構想の中で、昨秋より後藤幹事によって前橋地区の当クラブの活動が活発化し、地域マスコミからも、その活動が大々的に報じられ、ユーラシアンクラブも大いに知られることとなった。

後藤幹事の地縁により、更にユーラシアンロード構想を具体化する為に、前橋市に隣接して赤城山南面に大展開する富士見村に「群馬駆けるユーラシア乗馬センター」或いは「中央アジア民族センター」構想が実現化へスタートした。

去る1月28日、大野代表、後藤幹事と井口は、同構想実現化の重要関連先である富士見村役場及び同村村長に挨拶に出向き、その他、支援機関、支援者を表敬訪問した。

その中で、元富士見村村長、現赤城大沼用水土地改良区理事長、品川 正衛氏（明治40年生れ、御歳92才）に会って、この地区の牧畜、放牧について貴重なお話を伺うことができた。

同氏は小柄な体ながら、元職業軍人で明治人の気概を感じさせる。頭脳明晰、言語明瞭で、今だに現役で地域の為に活躍されている方だ。

明治から大正、昭和初期頃まで富士見村には、牛、馬約1000頭以上が夏は赤城山頂付近、冬は前橋市に近いふもとに移動して飼われていた。目的は自動車の代用である運搬用である。

特に馬は、犬よりも利口で、馬自体の目は20メートル先位しか見えないのに、遠くからでも主人であるか否かが判断できる。犬はキャンキャン吠えて、そばに来て主人と解ると後ずさりして主人に謝るとか。個々の馬の能力は耳の動きで解るとか。（人間は目？）馬は子供の時に足腰をきたえて育成しないと寿命が半分とか。（人間も同じ）馬は3才になるとその用途別能力を人間が判断する。（三つ子の魂100までも）等々。同氏の馬に対する愛着、好奇心は人一倍のご様子で、今でも、足がよくなれば乗馬したいとか、それがかなわなければ牧夫として馬のそばで生活したいとか、全く年齢を感じさせない御方で、アツというまの2時間が経過した。

品川氏の様な真っ直ぐな生き方をする人が30~40年前の日本の街には沢山いたが最近では全く見かけなくなった。明治は遠くなりにはけりどころか、しばらく振りに、やっと赤城山麓で会うことができた宝物“明治”であった。ユーラシアンクラブのお陰で、久しぶりに役得にありつけた。

★短信★ビレグさんの呼びかけに応え

モンゴルの子供達に文房具をプレゼント

クラブ会員の加藤優幸さんが2月にモンゴルに行くとの情報を得たので私の友人・知人から預かっていた文房具をモンゴルの子供達に届けて頂くことにしました。届け先はモンゴル人女性アズザヤさんが貧困家庭のために奮闘している「子供発展センター」です。この「子供発展センター」では日本語教師の日本人女性が現地でアズザヤさんの手助けをしています。届けていただく文房具はノート25冊、鉛筆8ダース、クレヨン36色9セット・30色1セット・12色6セット、おりがみ（65枚入り）10冊、おりがみの本1冊です。重量にして9kgになりました。ノミスギノスギ

★短信★ユーラシアンロード構想の一環として

内モンゴルの歌手オドバルさん前橋グランドホテルでコンサート

井口さんが報告しているとおおり、「赤城山麓ユーラシア・シルクロード文化村」計画が進行中です。昨年のユーラシア親善サッカーに続く第2弾ですが、コンサートも定期的開催する方向です。写真展企画も地元上毛新聞と協力して写真募集することになりました。現在多くのことを調整中で本格稼働もう少しです。ぜひ立ち上げたいと思っています。

■お知らせ■

☆会報12号が完成しました。昨年後半のユーラシアンフォーラムを集大成した「中央アジア資料編」といったものになっています。次号は、「ユーラシアの人物紹介」や「ユーラシアの笑い話」も特集に加えようと事務局会議では話し合っています。会報原稿の内容として推薦できる原稿があればお知らせ下さい。